

吊革のすつと傾き夕立晴

長谷川柊香

本来、列車が傾いているのだがそれを吊革の傾きとして捉える事で、この句の目線が非常にクローズドなものになっている。この視野の狭さが【夕立晴】というオープンな世界に繋がることで、私と世界の関係性が際立ってくる。列車の中の吊革と世界の中の私が同質のもののように照らされてゆく瞬間が良い。

書くことも書かないことも

すべて呪い

僕より背が高かった君とか

合川秋穂

上の句に対しての下の句【僕より背が高かった君とか】の情報量の少なさ。これ自体が【書くことも書かないことも】に繋がってくる。詩の余白には確かに呪術的な詩情が生まれるが、その余白は書くことによって生まれる。【僕より背が高かった君とか】と書くことで読み手は、この余白に意味を見出そうとしてしまう呪いにかかる。その呪いが今も解けないということで成り立つ稀な詩歌だと思う。

中山